



目次

- ▲研究 製炭法の研究
- ▲通信 校内雜件 寄宿舎便り
- ▲文苑 金北山、平凡 故郷の或る朝
- ▲雜報 件々
- ▲附録 卒業生名簿

大正四年三月二十五日 第六拾五號 每五期一刊 (日十月七年二十四治明) (日十月七年二十四治明) (日十月七年二十四治明)

研究

製炭法の研究 其三

北村 正夫

先月は面白い原稿が澤山にあつたので御遠慮申したのと一つにはあの大得意な愉快な気分を一月でも長く持ちたいため掲載を見合したのが正月號の大得意は三月號で如何に變化するであろうか

其三、再び大失敗を爲して檜崎式改良法の未だ完全無缺ならざるを悟る

校友諸君、鹿を逐ふものは山を見すと云ふことがある、茲に適切なる文句ではないかも知らんが當時の僕は屢氣樓の様な目の前にふらついて居る成効と云ふ鹿のみを見て事業の經營殊に歴史的に發達して來た在來法の革新と云ふ最も險阻な山坂のあることに少しも氣が付かなかつたのである、果せる哉頗る得意で頗る順潮であつた僕の進路に忽然として一大絶壁が顯して最早一歩も進むことが出來ない様になり哀れや成効の鹿は後足で砂を蹴て逃げ去つた、僕は最早其後を逐ふことが出來なくなつた

突然斯くも急轉直下的の大失敗をやうたには大に原因がある、夫れは第一に上等の木炭を造ても其割合に高く賣れなかつたために收支相償のこと第二に檜崎式の點火法は焚火

をなす必要なく勢力を省くの利益はあるが其檜崎くごの開閉や嵐口取付け等の手加減が一寸困難であるがため一二回の講習を受けた位では何れも失敗をして在來法より却て品質も劣り收量も少いので一度び改良法に着手したのも二三回も失敗すれば夫れに閉口して中止するものが多く中には熱心に繼續してやつた爲め元來が資力の乏しい炭焼であるから其爲めに破産をしたものさへあつて一時は好評を博した改良製炭法も次第に非難の聲が高くなつて折角組織した改良製炭組合も殆んど有名無實となり終には講習會を開いても講習生が出ない品評會を開いても改良炭を出品するものがない、炭の注文が來ても送るべき品物が無い、大に引立てを蒙つた郡長さんから八釜敷云ふて來ても申し譯けをすることが出來ない、餘り恥かしくて世間の人には會す顔がない何も彼もないく儘々となつて、昇天の得意も土佐製炭事業革新者の名譽も今は屢氣樓の様になつてなくなつた……嗚呼思へば何事も夢なりけりだ

其四、再び發奮して新改良法の研究をなす

校友諸君、世人は僕を評して意持の強い奴だと笑うが果して適評であるかどうかは僕自身には判らないが兎に角あれ程の自負心を有し、あれ程の得意であつたのが忽ちにして夢の様になつて前にも増した不名譽と

責任を負はされて見れば假令強くな
くとも男一匹たるものが何條此儘に止める
事が出来ようか、男子志を立て、製炭の改
良をなす若し効爲らばんば炭竈に飛び込ん
で人炭と化せんのみ、と云ふ程の勇氣はな
いが兎に角北村式と名のつく新改良法を考
案して見ようと思ひ立つた

(一)木炭の品質は在來法に比し稍優良なる
も其割合に高價に賣れず
品質の良否は製炭の法式にも多少は關係
するも主に炭材の品質と製炭者の技術に
よるものである、夫れ故檜崎式の改良法
も炭材と製炭者が同様であつたなら其木
炭の品質も甚だしき差異のないは當然で
ある、其上需用の最も多いのは實用に適
する品で特別に手数を掛けて上等品を造
り面倒な立通しの角俵に造ても價格が餘
り高くは需用者がない、さればとて廉
く賣ては利益がない、これでは何が改良
法であるか理けが判らないことになる
(二)電の収炭量は在來法に比し大差な
し、収炭量も亦製炭の法式に多少の關係
はあるが矢張炭材の品質と製炭者の技術
に關するものである、且つ炭質と収炭量
は反比的の關係を有して充分に煉らして

炭質を造れば収炭量は少くなる、若し炭
質も良好で収炭量も多く得んとすれば製
炭の時間が著しく長くなるのを免れない
夫れ故前項同様檜崎式の改良法でも他の
事情が同じであつたなら其収炭量も餘り
多くなはしないのである、殊に檜崎式製炭法
では點火の時に口焚きをせぬから自然炭
林の燃へ失せる量も多く上げ木の如きは
大部分灰となるを免れない夫れ故點火の
際に口焚きのため多量の燃料を費消する
在來法に比ぶれば假令全材料に對する炭
化率は多くとも同一の竈から收得する炭
量は格別の大差はない事になる之れは經
済上から云へば無論利益になるが現今の
製炭業者の實況から云へば左程有力たり
とは思はれないのである
(三)點火時間長く且つ手加減稍困難にして
熟練を要す
在來法では五六時間以上も口焚きをせね
ばならぬが檜崎式改良法では燐寸一本あ
れば夫れで容易に點火することが出来る
と云へば如何にも手数のかゝらぬ簡便な
方法である様に思はれる實際僕も此の點
火法が簡便であること云ふことに惚れ込ん
で一時は日本一の改良法と賞揚し専ら此
の方法を研究し之れを實行したのである
處が實際にやつて見ると簡單の様で却々
簡單でなく其加減を誤るときは炭質も収
炭量も非常に損失するのである之れが僕

も度々失敗を爲し又未熟の者が皆失敗し
て遂に前記の天不成功を來した主因であ
る、尙其上點火中に焚火をせぬので多少
は手数が省けるが焚火をするときは五六
時間位で點火するのに檜崎式改良法では
十五六時間もかゝる、之れでは差引何の
利益もないことになる
(四)土佐木炭の大需用地たる大阪市は黒炭
の需用少く又養蠶製糸家も主として白炭
を使用す
土佐木炭の大需用地は大阪市である其大
阪市は古くから九分通り白炭を使用し黒
炭を使ふものは極めて少ない又縣内で木
炭を多量に消費する養蠶家及製糸家も好
んで白炭を使ふので一體に黒炭の需用は
甚だ少いのみならず一般に中等品の廉價
なるものを好む風がある此の黒炭殊に上
等品の需用の少い土佐に於て歴史的に發
達し來つた在來法を革めて黒炭の改良製
炭法を普及せんと企てたのは思へば馬鹿
の骨頂、經濟學の一頁も讀んだものは需
用供給の關係位の事は知て居る筈である
飛石に火に最も弱い花崗岩で造つた石竈
で赤松材を以て白炭を造らうと企てた脱
線先生の馬鹿さ加減は又格別であると我
ながら感心せざるを得ない、然し幸にし
て大阪市迄輸送して恥の安賣りをなすに
到らなかつたのは先づ不幸中の幸であつ
た

以上は僕が大失敗をした主なる原因で之れ
を約言すれば
第一に炭質と収炭量が世人の豫期した程で
なかつたこと
第二に日本一の改良製炭法と云ふ程實際の
利益が多くなかつたこと
第三に點火に長時間を要し且つ其手加減
が困難で大に熟練を要すること
第四に經濟上の原則たる需用供給の關係に
注意せざりしこと
の四項である依て僕は此等の缺點を除て世
の製炭者の希望に添う様な新改良製炭法を
考案せなければならぬと考へた
『附記』以上の記事は讀むものゝ氣分によ
つて檜崎式の批難をした様にも解せらる
、恐れがあるが檜崎翁は田中長嶺翁と共
に製炭改良上の大恩人で斯界の偉人であ
る斯く申す僕には三村博士に次ぐ恩師で
ある僕の今日あるを得たのも半は翁の御
陰である何として檜崎式の批難が云へ様
かそれ前記の記事は唯僕の不徳は努力の
足らぬために失敗した原因を探究して之
れを列記したに過ぎないのであるから誤
解のない様に願ひたい

通信

校内雜件
○校旗披露 豫て購買利金の一部並に在校

生徒の寄附金を以てこれが資とし京都高嶋
屋呉服店にて製作中の校旗は二月下旬中に
完成着到せり、二月二十七日午後これが披
露式となす校長はこの校旗がこの校の精神
を代表すること恰も軍旗の如く壯嚴の意あ
るを説かれ進んで萬世無窮にこの校とこの
校旗との名を擧ぐるはこの校に職を奉ずる
ものと學ぶものとの責任なることを宣言せ
られたり
因に該校旗は前號所載の如く構地に校章
の外飾り拾葉を縁に染め抜き中央に『山林』
の二大文字を金地に繡いとり三尺に四尺の
縁は凡て地と同色の總にして竿及竿球これ
に稱ふ、蓋しこの色の沈着冷靜を表し徽章
の儼乎として且燦たるは中に剛毅不撓の大
勇猛心を包むに似たり、何れも堅實を旨と
すべき吾等林業者の表徴たらざるは非ず
○來年度校友會役員選舉 校旗披露式後來
開票の結果左之如し(三點者迄記す)
庶務部 一一三票 川口勇次郎君
六八票 竹村 節三君
六一票 拓植 五郎君
辯論部 一一〇票 坂本光太郎君
七三票 下平 佐門君
五九票 澤田 富可君
雜誌部 一一二票 加藤源一郎君
七一票 矢島 武六君
七一票 百瀬 三二君

擊劍部 一〇一票 加茂憲太郎君
九七票 長谷部久雄君
五〇票 今井 武雄君
弓術部 一〇九票 千村彌之助君
六九票 熊谷 清逸君
六五票 福澤 定雄君
庭球部 一一三票 千田 政美君
八四票 原 正 造君
五一票 丸山嘉一郎君
遠足部 九七票 古畑 秋藏君
八四票 梅村 計介君
六八票 森 次 潔君
○擊劍部進級式 右終りて豫て舉行の寒稽
古及紀元節試合の成績考査の上進級宣告あ
り特に來二月卒業すべき三年生のみには證
書を會長より授與し、他は口頭宣告ありき
の進級者氏名左の如し(括弧内は年級)
二級上 松川 久吉(三)種倉 隨藏(三)
二級中 長崎千万一(三)都竹武次郎(三)
二級下 柳澤止之進(三)
三級上 恩田司馬之助(三)
三級中 野 澤 博(三)
三級下 池田 仲次(三)吉川 眞夫(三)
加茂憲太郎(二)
三級下 水上 莊三(三)加藤朝太郎(三)
等々力官一(三)長谷部久雄(二)
澤田 富可(三)鳴澤 義男(二)
今井 武雄(二)平 田 實(二)
四級上 萩原 惠治(三)飯沼 要人(二)

- 四級中
 - 松澤 敏男(3) 開運隆飛登(2)
 - 小池 茂樹(2) 坂下光太郎(2)
 - 奥村 和吉(1) 藏田 毅郎(1)
 - 山崎 兵平(2) 下平 佐門(2)
 - 近藤 幸吉(3) 各務 傳六(1)
 - 白木 老雄(1) 清水 徳久(1)
 - 柳原 武重(1) 佐々木久一(2)
 - 丸山 嘉市(2) 千田 政美(2)
 - 新井 清美(2) 喜多村 弘(2)
 - 宮川 昌平(2) 岩田 元吉(1)
 - 上島傳五郎(1) 長坂 清人(1)
 - 長谷川 毅(1)
- 四級下
 - 宮嶋 岩見(1) 小 田 實(1)
 - 安江悦次郎(1) 丹 澤 潔(1)
 - 皆川 秀雄(1) 岡 田 籌(1)
 - 川口勇次郎(2) 白井素慶次(2)
 - 鈴木 繁(1) 藏 尾 真(1)
 - 久保田邦治(2)
- 五級中
 - 伊保幾太郎(1) 武 居 章(1)
 - 富士川鏡一(1)

寄宿舎便り

時の推移とお天道様の運びとは人間の身の情けなきに如何ともすべからず候、流石に時めきし淨海相國すらも入日を宮嶋に呼びかへし兼ね候由、我らにとりてはるれよりも尙々時の進むか悲しく御座候、居

寄宿舎便り

所に牽かるゝの思ひとは強ちに線言にては候はず、立春の字面のみ陽氣立ち候はしもの、吹雪もし寒もし霞もして一陽來復は何時の事かと悲しまれ候、到る處堅き氷を見つゝ二月も暮れ候、暮れ近き廿四日例の舎生會を催し候、當日は昨年本校の不詳事件の發生せし九一週年にて候ひし故、舎内より、の回顧談と評定とに充され候て、設けの會も亦賑しく候ひし、結局往を逐ひ來を迎ふること晏如として淡く水の如く候て御座候、廿五日、廿六日……

寄宿舎便り

満目の積雪見馴れては何のふしも無之候へども、昨今の如き寒月明く照り、乾坤一白唯閑として寂たるに、前山後嶺悉く銀臺をなし瓊玉を飾るありてはうらやみ蘇峽のブライドを喚起仕り蒼白の空に向て高呼しや候、從て寒氣は甚敷月初の如き日中零下十度を示し夜に入るやストーブの赤さ増しての邊り賑ふも理りにて候よ、かくの如く温き團樂に華やかにして且つ暮はしき寮のロマンスはこの季に最多候、爐邊の一人去り二人去りて机に倚り聲は静まりかて夜は更けストーブのみ彌赤く候

寄宿舎便り

静肅なる時の進行は、萬物覺醒の春へ春へと急ぎ候、花咲き風薫る頃には寮舎三年の老武者共その影をひそめ新らなる人々によりてまた榮へんものと存じ候、余輩が舎の便りを草するもこれが最後にて候、いでや元筆をば擱きて、寮の千秋萬歳を書き、寮弟達の行手幸多かれと祈り進せむ到らざりし我筆と不肖の兄たりし我らを咎め給ふな、さらば暮しき寮よ！第二のホームよ！(三月六日試験近き日七室にて)

符牒なんだ、の他國旗だとか家紋だとか信號だとか商標だとか何處迄も人間社會には目印が必要なのに違いない、如何にも蒼蠅いやうだが一面から見れば秩序だとか表示だとか云ふ點がその特徴で又缺くべからざる點であらう。先輩諸君の昔した寮生活の少し思ひ起して下さり、目印について一番聯想の多いのは上草履の烙印でせう、この目印によつて湯殿や憚りですぐの主公を直覺的に思はせる事が多い、一つ舎を通じて振つてるものを書き上げて御照會申しませう。

(1)△ これは丁君のである、入舎以來未嘗て改めしことなしてふ歴史付の烙印である何でも同君の説によると、參謀本部の物には凡てこの印があるとの事、烙印が極めて大袈裟で草履面一杯になつてゐるだから誰れか穿き違へて失敬してゐても駄目だ！それは角頂か足の外までニョキリ覗いてゐるから。

(2)△、何だか八卦のやうだこれも入舎以來一點張である、兎に角上記二者は確實な主義の貫徹を思はしめるに充分だY君のである。

(3)△これはM君のだ、烙印の大きなの目を牽く點から云へば△の次だ

(4)△六合 天地四方を足下にするなんて、ちと大きすぎる、地震でも起つたら奈何する然し心配はない、この生念Y君は体量質

に十八貫七百ビソ、六合を踏みしめるに足るのである、但しこの六合を寄宿舎の定量五合飯を超ゆる事一合など、下司に解釋しては近頃以て迷惑仕る。

(5)△ I君用 この草履は新聞縦覧室の入口と某處の入口に長坐して主待顔であるのをよく見受ける

(6)△正義 Y君今茲元朝冥悟するところありて定めし也といふ因縁付のものである、歴史曰く村としてはこれを推した。

(7)△サ？ 讀方が頗る振つてる曰くサカ舎生會の恋愛嬌家として有名なS君のだ

(8)△下 何んでも姓名が丁丁なので面倒だと云ふ理由も一つ代數的見地からとて丁としたといふ丁君の説明だ、この頃は主公が外泊してしまつたので久しく見受けぬ以上を八傑物として推すこの他華、天人、長千、代、南、碧、慾等が干紫萬紅と入り亂れてゐる、然しこれらの注目すべき烙印も二二句で跡を断つてあらうれば卒業、退舎が近いから

(三月のはじめ一翠といふ印の閑人記す)

文苑

金が北山 羽田龍尾

金北山は海拔約四千尺の高き有る且緯度から云ふも絶頂附近には高山植物多かるべしと思つて居た、然るに登山して視れば

れが極めて少いので有るうれば一は佐渡は緯度から云ふと高いが對馬海の衝路に當つて居るから比較的溫度が高い、海中に孤絶して海風の衝路に當つて居るが故に高山植物は存外少いのである却て杉の天然林が殆んど人造林の如くになつて居るは日本に於て稀有の事であるから其の道のりに取つては研究の材料にならうと思ふのである、それから別に金北山の特色に付いて云ふと此の山に登ると越佐の水道——内海と日本海とが瞰得らるゝのみならず佐渡の大体を双眸の中に收め一方に於ては十餘万石を生産する平原を一眸に收め得らるゝのである、而して更に周圍約五里の湖水をも同時に眺め得る事である。此様に打ち揃ふて、見える所は此山より更に高度の山へ登つても極めて少いのである。大概高度の山へ登ると山又山が波濤の如くに重なつたり又遙に蒼海を下瞰し得らるゝのである。去り乍ら一種の海水と十萬石の平原と將又秀靈の湖水までをも一眸の中に收むる景色は實に稀有である、殊に余は舊中元の日此の山に登つて皎々たる月光の下に這般の景色を見渡す事が出来たのであつた、其時恰度加茂湖の水面に別に映る景色は餘程異様の觀で有つた、其の形は恰も斑輪の如くで四面の筋までも見ゆる——頭でも足でも爪でも見える天下の名山に遊ばんとするものは此の山上の古洞に宿つて月夜の絶景を賞する事を勧めるのである。

日本の島國で隱岐の最高點を大満寺山と云ふ海抜約二千尺許り、金北山の半分より稍高い山である此山の眺めはと云ふと壯大ではあるが低いから眺望は良くない淡路の面積は此國に髣髴して南方に海が見えてる此處の金北山に比すべきものには扇山と云ふのがある淡路富士と稱して居る淡路の人は子供の時から一回は登山することとなつて居る恰度金北山へ男子七歳になると初登山をするに似て居るのである扇山は金北山より視れば低い加之山上に大なる寺がある其處には名物の牡丹餅等を販つて居る飲食物などは直ちに所所で辨するので便利である代りに俗地となつて了つた。金北山の眺望に比すると麗しき湖水もなければ廣い平原もないが金北山は扇山の二つより高いから従つて眺望は壯大である故に金北山は山が豪いのではない國の全体を瞰下し小國に似合はない大平原を一眸の中に收むる所に價値があるのであるそれから水蒸氣が非常に多いから樹木の繁殖力が旺盛である故に樵薪を造るには必ず適する水蒸氣は茸の發生を助けるからである

附(四拾五年の記憶から) 金北山麓南片邊山(壯海岸)には御料局の經營に關る模範栽培地がある年々に宮内省へ獻納する程であるから其の成績も略々推察されるであらう。此事業の成功者こそ實に隱岐の人那波善吉氏である明治卅二年頃(?)某汽船長の義侠により裸一貫佐渡に渡り時の御料局出張所長渡邊吾朗氏に頼りて此事業を始め刻苦勵遂に功を收むる十年突然此國を去つて(渡邊氏の諫告を斥けて)現今は臺灣の阿里山中に活躍してゐるうである同氏の置土産たる該事業は不幸未だ見學の機を得ないが何れ時節到來諸兄に報する事あらう。(完)

平凡 三年 翠村

平凡! かう云へば人々は一概にこれを卑下する、しかしこれには何の主義も根據も定見もなく唯聞いた丈の感觸と判斷とに任せた儘の叫びであるのだ。吾々もたまには自分のライフは如何にも平凡だと云つて嘲る事がある、然しよく考へて見ると平凡位尊いものはない、若しも世の中に平凡がなくて、奇矯家や脱俗者が超然主義ばかりであつたなら社會は成立たない、平凡は社會の大勢力である、又平凡が他日の非凡を生むのであつて、非凡は決して天稟ではないのである

故郷の或る朝 一年 山下蘇水

冬の午前の日はいつぱいに軒から庭にひろがつて居た。 家で圍まれた廣い庭を蔽ふた枯芝は、小暖かい日さしをじみじみ吸ひ込んで、背に

芝の枯葉をのせたまゝの猫がその上へのびくと横はつて居る。彼方竹垣越しの坪の内は廢のかげなので、寒い冷たい空氣が細かく立てこんで、置石の苔の冬らしくしめつた上に南天の寂びた紅い實が二つ三つころがらつてゐる。私は縁側に腰かけて少しながり匂配に凝ら出して來た「自然と人生」をひもときはじめの從兄は學校だし、伯父や伯母は、時々新聞のがさぐさい音と、鉄をちよきんとやらせる音とで、障子隔てた室に、いつもの通り長火鉢の前や籠盤の前に座つて居るんだなと肯かせる。大きな家は、常住、微かに鳴る鐵瓶の音と、時計の刻みの外音もなくて、快い静けさが領して居る。

「先にやあよく讀んだものだつけない」と今尚語誦し得る所にひよいと出遇ふとこんな語がふいと懐古的句調で飛び出すと、いつとも知れず心は字面から離れて、これを寶玉のやうに大切がつて持ち歩いてた頃から、うの周圍の景等を自然と思ひ出したのである。 森の切株に腰掛けて朽葉の香をしみじみと嬉しく思ひ乍ら、紙面にちら／＼葉を洩れて來た僅な日光の躍るをじつとみつめて何とも云へぬ平和なりの瞬間を味ふやうな氣持で居た秋の日や、匂ふやうな空氣の闇をぱりつめて居る夏の夜、この書をうつとよごころにしのばせて歩けば不圖脚下の白い

花に氣づいて立止まるそんな時等がひよいと記憶の底から浮き上つて來て、それが清新なうのまゝの感じをもつて自分を訪れるのである。 晩春の日、薄い夕日に煙より乍ら、これを讀んで居た時のことを思ひ出された田畦のふつくらと柔らかな青草のしとねに座つて自分は見ることもなしに好きな章を讀み耽つて居る。白い雲片が蒼空に浮いて居て、自分の傍にも脚下にも紫雲英の花がいつぱいに光りを含んで、春の日の讚美を紅い色にシンボルさせて居る。自分はふいと頭をもたげ、薄い夕日は一望はてなき野にしみ充ちて春の夕の和ざがごとく野にこめる。「静かだなあ」とその聲音の下から何とは知れず淡い寂しさと甘い哀愁が少年の私の胸にも一すつとしみ込むを覺わて、うつと又書へ眼を落す……

夏になるとよく魚釣りに行つたものだつたつけ「長間の池には主が居る」と昔からの傳説の程だけあつて、物凄いな深く碧々と湛へた大きな池畔の、老松の根っこに釣竿をさしをいて、ねころび乍ら「……茶の花ほのかに香る夕……」とかなんとか獨誦する中、いつしかうと／＼となる。 ……松のゆれる音が靜かに頭上でする。それをすかして青々とした空から清い日光が放射する。「ふん眠つたんだ」早速とび起ると餌は早とられて居る「畜生」とい

ま／＼しげに叫んで水中を覗くと鮒が若みの中に悠々と泳いで居る…… あれから二年過ぎてしまつたんだ! 飯田へ行つてからは本なにか馬鹿／＼しくなつてしまつて、いたすらの御大將の私にもこんなことが昔しはでもあつたから可笑しい…… その畦道も、池も私はよく知つて居る橋を渡つて小徑を辿り、堤をかけた上りの池はあるでも私は行かうとはしなかつた。何故といへば幻影をこはしたくはなかつたからうつといつ迄も私の胸へしまつて置きたかつたから…… (終)

編輯部より 嚴寒漸く退き春和景明の候を迎へ候折から校友諸兄益々御勇健奉大賀候、願れば生等驚才を省みずして本部に責を受けしは去春にて候ひしが爾來格別の貢獻も發展も本誌の上に寄與する能はず碌々として茲に到り候、次第顔顔の外無之候、然れどもその間些したる大過もなくして一歳を閱し、本誌も耳須の齡を超へしこと、偏に校友諸兄の驥尾に附して驚馬の蹄脚を伸せしに外ならざるものと今更に顧問先生及諸兄の高庇指導を深く感佩仕謝意を表し候 茲に本部を辭し本誌上に筆を断つに當り前

途洋々たる本誌の使命を祝福し併而本會の發展と諸兄の健康とを禱上候 不宣 三月 日 雜誌部員總代 都竹武次郎 丸山岩吉

安藤前校長慰勞金申込報告 (第五回)

- 金貳圓 (即) 古畑 金藏君
金貳圓 (即) 樋口 徳一君
金壹圓 (即) 鷲澤 忠治君
金五拾錢 (即) 長谷部 兵治君
金五拾錢 (即) 吉田 佐十郎君
金壹圓 (即) 内田 益治君
金壹圓 (即) 中島 昌利君
金壹圓 (即) 藤田 要吾君
金壹圓 (即) 不 免修 六君
金壹圓 (即) 岡西 謙三君
金壹圓 (即) 横山 治人君
金壹圓 (即) 林 卓二君
金拾四圓拾錢 (即) 在校生田近善右衛門外百四十名一名金拾錢宛
小計貳拾八圓拾錢
累計金七拾四圓拾錢
(附記右安藤先生慰勞金申込者にして未納の諸君は四月十五日限御送附願上候)

附錄

卒業生名簿 (イロハ順) 第一回 (明治三十七年度卒業)

- 官職其他 本籍 姓名
鳥取縣林業技手 長野縣 伊藤 兵太
家業二從事 同 林 哲治
朝鮮總督府技手 同 原 四郎
家業二從事 同 原 庄次郎
愛媛縣溫湯郡役所技手 同 兒 野 榮
朝鮮總督府技手 同 岡戸 廣治
朝鮮總督府技手 同 岡田 恒治
木曾支局技手奈良井出張所 同 大森 久治
鐵道院書記 同 輪湖 正由
長野縣林業技手 同 高 樋 博
沖繩縣技手 同 園原 咲也
不明 同 征矢野克巳
鳥取縣日野郡役所技手鳥取縣 同 坪倉藤三郎
長野縣大町小林區署山林技手長野縣 同 中村 豊治
新加坡護國院栽培所 同 松原 三郎
福井縣遠敷郡役所林業技手石川縣 同 福田友二郎
家業二從事 同 長野縣 福井 利吉
宮崎縣加久藤小林區署山林技手長野縣 同 古根 是
愛媛縣宇摩郡住友別子 同 石川縣 小瀧升太郎
嶺山所山林技手 同 長野縣 小松 精内
鳥取縣郡役所林業技手 同 遠藤 宗作
東京府技手 同 青戸爲九郎
廣島縣技手 同 鳥取縣 齋藤 正雄
長野縣上田小林區署山林技手長野縣 同 齋藤 正雄
長野縣白田小林區署山林技手 同 高橋 作治
福島縣原町小林區署山林技手 同 原田 義治
長野縣上田小林區署山林技手 同 森 正治
家業二從事 同 青林縣 祐川 昌平

- 死亡 長野縣 中村 茂
第二回 (明治三十八年度卒業)
東京駒場農科大學林學實科石川縣 川岸滋次郎
家業二從事 同 岐阜縣 岩久 宗治
朝鮮總督府技手 同 長野縣 林 與五郎
家業二從事 同 同 原 傳
靜岡縣安部郡役所林業技手 同 林 卓次
鳥取縣林業技手 石川縣 温井 誠一
愛媛縣住友別子嶺山山林技手 同 乙谷 耕吉
臺灣總督府技手 同 長野縣 大脇 又衛
不明 同 加藤 純一
鳥取縣四郡役所技手山口縣 同 武 久貞一
不明 同 長野縣 中澤 龜吉
家業二從事 同 同 中嶋源一郎
鳥取縣能美郡役所林業技手鳥取縣 同 翰 政義
新潟縣林業技手 同 長野縣 宇佐美周榮
福島縣林業技手 同 同 倉澤 眞
家業二從事 同 同 黒岩 正平
朝鮮總督府技手 同 同 柳澤 邦信
名古屋支局技手 同 同 松井 定道
鳥取縣林業技手 同 鳥根縣 遠藤治一郎
東京大林區署山林技手 同 長野縣 鷲澤 忠治
三重縣林業技手 同 同 木村鐵次郎
愛媛縣住友別子 同 石川縣 木下 清
嶺山所山林技手 同 同 伊豫國西條小林區署山林技手長野縣 同 南村 末吉
茨城縣日立嶺山事務所技手 同 下條初太郎
名古屋支局技手中津出張所岐阜縣 同 篠原 忠治
上水内郡役所林業技手 同 長野縣 杉本 貢

第三回 (明治三十九年度卒業)

- 死亡 同 正又實次郎
同 同 平澤 政吉
同 同 仁 科 春
同 同 峰谷 光香
同 同 岡田 直一
同 同 奥卷金次郎
同 同 南 勇次郎
西筑摩郡日義小學校教員 長野縣 狩戸 深一
盛岡小林區署森林主事 岡山縣 戸田 績
木曾支局技手三股出張所 長野縣 千村 重喜
木曾支局技手湯丹澤出張所石川縣 同 岡田彌兵衛
石川縣河北郡役所林業技手 同 但馬 廣造
木曾支局技手飯田出張所 長野縣 巖野 利雄
家業二從事 同 同 鶴殿 正雄
木曾支局技手敷原出張所 同 野知里慶助
熊本大林區署山林技手 鹿兒島縣 山下 藤一
朝鮮總督府技手 長野縣 柳澤 邦治
熊本縣多木小林區署 熊本縣 山下 常紀
山林技手 同 前野 慶一
帝室林野管理局技手 長野縣 古畑 金藏
鳥取縣若槻官行所付所 同 小林柱一郎
青森縣川内小林區署山林技手 同 小藤作四郎
大坂大林區署山林技手 石川縣 辻 敬二
石川縣林業技手 同 寺嶋 正治
家事二從事 同 長野縣 清澤己未衛
米國シヤトル在住 同 石川縣 木下安太郎
家業二從事 同 同

第四回 (明治四十年度卒業)

- 北海道廳拓殖部技手 同 宮崎清太郎
更級郡役所林業技手 長野縣 宮田 實
石川縣珠洲郡役所林業技手石川縣 同 宮森太一郎
齒科醫 同 長野縣 宮下 信一
長福寺住職 同 同 三宅 周吉
家業二從事 同 同 代田善次郎
青島市久留米町廿五實業視察同 同 杉本 純平
死亡 同 同 加藤十七藏
同 同 河島 正己
同 同 松原 秀吉
同 同 下畑 徳十
木曾支局技手湯丹澤出張所 同 市川 潔
朝鮮總督府技手 同 長野縣 西野 入徳
家業二從事 同 同 太田喜代松
木曾支局技手野尻出張所 同 同 大島 角藏
愛媛縣住友別子 同 同 永 井 順
嶺山所山林技手 同 同 和田 宗吉
長野縣省森林主事 同 同 川崎 本雄
美術研究者爲上京 同 同 上條嘉一郎
長野縣岩村小林區署森林主事 同 同 由尾 忠助
木曾支局技手野尻出張所 同 同 竹内房太郎
青森縣内真部小林區署 同 同 武居 文作
山林技手 同 同 永田精一郎
家業二從事 同 同 山梨縣 中嶋 昌利
管理課 林業技手 同 同 矢嶋 駒二
埼玉縣林業技手 同 同 松島 九平
木曾支局技手玉瀧出張所 同 同 小林 恭市
家業二從事 同 同

第五回 (明治四十一年度卒業)

- 盛岡小林區署山林技手 同 松館藤太郎
甲信銀行福島支店員 同 同 新井喜多雄
長野縣白田小林區署森林主事 同 同 澤田貞次郎
木村通運會社 同 同 木村音次郎
木曾支局技手野尻出張所 同 同 宮崎 二郎
家業二從事 同 同 水野 忠一
鐵道院青森保線事務所 同 同 廣瀬静之進
家業二從事 同 同 肥後金四郎
養蠶業 同 同 肥田幸一郎
茨城縣西茨城郡立農學 同 同 平田 稻男
校助教諭兼會監心得 同 同 宮崎源一郎
死亡 同 同 三原 昇
家業二從事 同 同 池田藤三郎
茨城縣太田小林區署森林主事 同 同 林 省 三
名古屋支局技手七宗出張所 同 同 千村 善三
東京市青山南町五ノ八十四同 同 同 小山田喜十郎
木曾支局技手玉瀧出張所 同 同 奥原吉右衛門
愛知縣栗原郡淺井町黒岩 同 同 脇田 義正
長野縣小林區署戸隠 同 同 金井 澄水
靜岡縣林業技手 同 同 横山 治人
秋田大林區署山林技手 同 同 高橋 金作
不明 同 同 竹内 茂
下高井郡役所林業技手 同 同 仲俣 伍市
名古屋支局技手岩村分擔區岐阜縣 同 同 上田 祐二
木曾支局 同 同 久保田傳一
岐阜縣高山小林區署森林主事 同 同 松澤 万吉
青森縣内真部小林區署山林技手 同 同 藤卷 壽一

木曾支局技手野尻出張所 同 小池 新伍
 家業二從事 同 寺嶋 俊一
 不明 同 北澤時三郎
 木曾支局技手玉瀧出張所 同 北川 信美
 石川縣能登郡役所林業技手石川縣 宮城 忠藏
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 宮崎 惠喜太
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 水橋 要作
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 樋口 勇
 朝鮮總督府技手 同 瀨 在 實
 岩村田小林區署森林主事 同 小林 彪
 死亡 同 櫻 井 忠
 同 同

第六回 (明治四十二年卒業)
 家業二從事 山梨縣 一木 虎雄
 福嶋小林區署山林技手 岐阜縣 原 雅助
 家業二從事 長野縣 一之瀬 繁壽
 茨城縣日立鐵山事務所 同 原 七郎
 秋田縣太田鐵山事務所 同 原 喜四三
 木曾支局技手三股出張所 同 峰須賀宮次郎
 朝鮮總督府技手 茨城縣 本多清右衛門
 家業二從事 長野縣 洞山鹿之助
 同 同 岡戸 郁三
 千葉縣廳技手林業技手 同 若林遊龜尾
 秋田縣阿仁鐵山事務所 同 田中 吟重
 木曾支局技手玉瀧出張所 同 中嶋 要人
 山形縣新庄小林區署森林主事山梨縣 仲田 惠令
 名古屋支局履付知出張所 同 中田 辰雄
 家業二從事 同 向井辰次郎

第七回 (明治四十三年卒業)
 秋田縣早口小林區署森林主事 野村 光智
 愛媛縣宇和郡役所林業技手 倉科浦一郎
 茨城縣日立鐵山事務所 同 山村 次一
 愛媛縣廳技手林業技手 同 松井莊太郎
 木曾支局技手奈良井出張所 同 若澤 庸三
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 宮川 永三
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 嶋田雄太郎
 山形縣小川區署森林主事和歌山縣 南勝右衛門
 朝鮮平安北道龜城町古河金山長野縣 宮入 汎省
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 原田 英治
 青森縣喜良市小林區署森林主事 同 栗野原治平
 死亡 同 松尾 忠恕
 同 同

第八回 (明治四十四年卒業)
 福嶋縣濱江小林區署森林主事長野縣 加藤 清一
 木曾支局技手玉瀧出張所 同 米山 修
 木曾支局技手野尻出張所 同 高柴真次郎
 木曾支局技手野尻出張所 同 中澤 揚
 松本警察署巡查 同 村井正三郎
 同 同 上原 上
 家業二從事 同 松本 清太
 木曾支局技手三股出張所 同 小池金三郎
 茨城縣高萩小林區署森林主事 同 小石彌三郎
 家業二從事 同 小林六三郎
 木村商人 同 小林佐久馬
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 北村竹次郎
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 宮澤 清輔
 盛岡高等農林學校學生 同 日野 雅亮
 家業二從事 同 森 儀一
 木曾支局技手妻音出張所 岐阜縣 澤木 儀一
 死亡 同 長野縣 向井 政勝
 同 山梨縣 同

盛岡高等農林學校學生 同 加藤 正次
 家業二從事 同 土屋 浩三
 同 同 吉村金次郎
 木曾支局履王瀧出張所 同 塚本 三樹
 青森縣大畑小林區署森林主事 同 梨原 貞次
 木曾支局技手上松出張所 同 倉澤 健雄
 青森縣增川小林區署森林主事 同 丸山金三郎
 家業二從事 同 曲田 秀二
 同 同 藤田 要吾
 下高井郡立農林學校助教 同 小池 一郎
 家業二從事 同 小林 哲三
 秋田縣荷上場小林區署森林主事 同 木村 康明
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 宮崎 光治
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 宮澤 嘉一
 高知大林區署下ノ加江 同 高田勘四郎
 小林區署森林主事 同 篠原 昇士
 秋田大林區署能代 同 鹽川 金次
 北安藝郡役所林業技手 同 樋口久治郎
 近衛步兵第三聯隊 同 同
 第三中隊現役兵 同 同
 與輝寺 同 同

第九回 (明治四十五年卒業)
 青森縣大畑區署川田 長野縣 伊藤 德之丞
 小林區署森林主事 同 伊藤 昇次
 松江市松江小林區署森林主事 同 石曾根四郎
 名古屋支局履小坂出張所 同 西尾 嘉一
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 岐阜縣 川合 清行
 木曾支局履王瀧出張所 長野縣 吉田佐十郎
 岐阜縣廳林業技手 石川縣 吉澤 英雄
 東京大林區署森林主事 岐阜縣 同

第十回 (大正二年卒業)
 兵庫縣有馬郡山田口村 兵庫縣 多田慶次郎
 善照寺 同 高野 薰見
 木曾支局履上松出張所 同 村松 一清
 高知大林區署 同 征矢野余所夫
 東京駒場農科大學林學資料科生 同 征矢 朴郎
 木曾山林學校助手 同 角田 久福
 家業二從事 同 山本政之丞
 東京高等師範學校學生 同 山本 克人
 家業二從事 同 前田 正義
 山梨縣廳林業技手 山梨縣 九山 久雄
 木曾支局履原出張所 長野縣 小羽根安次
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 小林 秀一
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 安藤 次郎
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 佐藤 一郎
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 岐阜縣 木下 稗藏
 山梨縣恩賜縣有財產管理課 同 下村 博
 木曾支局履妻音出張所 長野縣 篠原 爲一
 豐橋工兵第十五大隊一年志願兵 同 杉 本 直
 木曾支局履湯丹澤出張所 同 同

第十一回 (大正三年卒業)
 東京大林區署濱江 長野縣 市川 豐三
 小林區署森林主事 同 長谷部真一
 秋田縣廳田小林區署 同 原 貴一
 家業二從事 同 原田 洋平
 上田小林區署 同 羽田 龍尾
 青森縣大畑小林區署 新潟縣 細江七兵衛
 木曾支局履原出張所 岐阜縣 岡山 益善
 家業二從事 石川縣 同

(可認物便郵種三第) 號五拾六第

東京支局甲府出張所履	岐阜縣	市岡	新八
太田原小林區署履	同	今井	安男
家業ニ従事	愛知縣	岩瀬	幸吉
名古屋支局付出張所履	長野縣	石坂	季治
茨城縣高萩小林區署履	同	長谷川	房雄
秋田縣舟形小林區署履	岐阜縣	原	潔
岐阜歩兵第六十八聯隊 第三中隊一年志願兵	同	新田	穰
秋田縣早川小林區署履	長野縣	千村	吉雄
山梨縣恩賜管理課谷村出張所履同	塚田	大	
太田原小林區署履	岐阜縣	中垣	英一
名古屋支局大磯出張所履	同	梅田	吉郎
青森縣鹽澤小林區署履	長野縣	久保	照人
青森縣川内小林區署履	同	山崎	三男
東京大林區署履	同	柳澤	義雄
家業ニ従事	石川縣	深美	利一
福島縣相馬郡石神村斫伐所長野縣	二木	季人	
家業ニ従事	廣嶋縣	不免	修六
帝室林野管理局札幌支局履	長野縣	赤羽	高
山梨縣恩賜管理課履	山梨縣	佐藤	光造
同上	長野縣	齋藤	海藏
帝室林野管理局	長野縣	酒井	光義
大坂出張所	同	澤柳	壽夫
久留里小林區署	同	關	琴義
水戸工兵第十四大隊 第二中隊三年志願兵	同		

第十一回 (大正三年度卒業)

廣告

右名簿中不明の方有之雜誌發送其他差
 闕へ候間會員諸君にして若し御承知の
 方は校友會宛御報知相煩度此段廣告候
 也

卒業生狀況調

大正四年三月現在

山林局及大林區署へ奉職せる者	七十三人
帝室林野管理局に奉職せる者	四十九人
府縣郡村森林業務に従事せる者	五十九人
朝鮮及臺灣總督府森林業務に従事せる者	十人
教職に在る者	四人
會社或は大資本家に入れる者	十五人
海外に渡航せる者	二人
尙修業中の者	六人
家事に従事せる者	五十六人
兵役にある者	八人
死亡者	二十一人
其他	八人
合計	三百一十一人

大正四年三月廿三日印刷
 大正四年三月廿五日發行

(定價三錢)

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
 編纂兼發行人 安井 正夫
 長野市南縣町已三番地
 印刷者 田中 彌助
 長野市西后町乙二十一番地
 印刷所 長野新聞社活版部
 長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
 發行所 藍澤書店